

平成三十一年度 入学試験問題

国

語

文・教・経・医―医 二月二十六日(火) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十二ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部・教育学部・経済学部・医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、文学部・教育学部・経済学部・医学部医学科志望者は、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所を受験番号を記入せよ。
- 7、理学部志望者は、答案紙の所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
- 8、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 9、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
- 10、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 11、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

プナンの民話は、動物譚の宝庫である。

かつてマレーグマだけに尻尾があり、他の動物たちにはなかった。マレーグマの尻尾は格好よく見えた。動物たちはマレーグマのところに出かけて行って、尻尾を分けてくれるように頼んだ。マレーグマは来る動物来る動物に、気前よく尻尾を分け与えた。最後にテナガザルも尻尾をねだりにやってきた。しかしその時には、マレーグマに尻尾の手持ちがなくなっていた。それで、今日、マレーグマとテナガザルには尻尾がない。

マレーグマは、人はケチであってはならない、寛大な心を持つべきだという、人に範を^aたれる存在として描かれている。この民話は、「ケチはダメ (amui ba)」というメッセージを伝えている。プナンにとつて、寛大であることは重要な美德である。プナンは、つねに、もらったものを惜しげもなく誰かに分け与えることが期待されている。私が年二回のペースで訪れる際に、いつも世話になっている男性の家族にお土産として持っていく時計やポーチ、バッグなどは、すぐにそれらをねだる別の誰かの手に渡る。さらにそれらは、また別の人へと渡っていく。遠く離れた森の狩猟キャンプを訪ねた折に、見知らぬプナンの男が、私がある人物にプレゼントした日本製のウエストポーチを身につけていたことがあった。贈り物は、自らのもとに抱え込むのではなく、それを欲しがる別の誰かに惜しみなく分け与えることが期待されている。

もらった贈り物を他人に分け与えることは、プナンが生まれながらに持っている「徳」なのだろうか。いや、そうではないように思われる。私がプナンの居住地を訪ねていくと、ホストファミリーからは、お土産をけっしてみながいる前で見せないように言われる。みな、あれが欲しい、これが欲しいと言って品物を持ち帰ってしまい、手元には何も残らないことを危惧するからである。逆に言えば、手元にものを置いておきたいというのが本心であり、「社会慣習」として、ものを惜しみなく他人

に与えることがおこなわれているということだ。

ある時のことである。私が幼児に飴玉をいくつか与えると、彼女はそれらを独り占めしようとした。周囲にいる子どもが欲しそうにナガめていたが、幼児は飴玉をしっかりと身に引き寄せて手放そうとはしなかった。母親がそれを見て、傍にいた子どもたちにも分け与えるように促した。最初は怪訝な様子だったが、母の教えに従って、幼児は飴玉を他の子どもたちに配り始めた。プナンは、そのようにして後天的に、与えられたものを分け与えるという規範を社会に広く行き渡らせてきたのである。ものを惜しみなく分配するという寛大な精神は、けっして生まれながらのものではない。

ケチの小さな芽は、見つけられたらただちにつぶしにかならなければならない。

フランスの社会学者マルセル・モースは、ニュージーランドのマオリのものの霊、「ハウ」を取り上げたことで知られる。マオリは、贈り物が贈り手から移動する時に一緒に移動する「贈与の霊」のようなものがあると考え、それをハウと呼んだ。ハウは贈り主のもとに帰りがたるので、別のものに乗せてお返ししなければならぬ。

アメリカ大陸では、インディアンたちもまた、贈り物を交換し、何かをもらったら必ずお返しをしていた。インディアンは、白人の行政官が村を訪れた時に、みごとなパイプを贈り物として贈った。数ヶ月後、インディアンが、その白人のオフィスを訪れると、暖炉の上にそのパイプが飾ってあるのを見て、「白人はもらったもののお返しをしない。それどころか、もらったものを自分のものにして、飾っている。なんとという不吉な人々だ」と感じたのだという。インディアンにとって、贈り物は、白人がするように、飾っておくべきものではなかったのである。

中沢新一によれば、インディアンにとっては、贈り物を自分のものにしてはならず、贈り物は動いていかなければならなかった。贈り物と一緒に「贈与の霊」が、他の人に手渡される。「贈与の霊」は、別のかたちをした贈り物にそえてお返ししたり、別の人たちに手渡したりして、動かさなければならぬ。中沢は、「贈与の霊」が動き、流れてゆく時、世界は物質的にも豊かになり、人々の心は生き生きとしてくるのだと言う。

資本主義のもとでは、資本が一ヶ所に集められ、事業に投下されることによつて経済活動がおこなわれる。やがて、お金が

どこかのためにこまれ、経済が停滞すると、社会そのものに活力がなくなってしまう。そうしたお金と社会が関係している点に着目し、「お金は老化し、消え去らなければならない」と唱えたのがドイツの経済学者シルビオ・ゲゼルである。世界恐慌の時代、財政破綻に陥ったオーストリアのある町議会は、その町だけで通じる「自由貨幣」を発行することを決めた。それ以来、地域通貨を導入し、貨幣を循環させ、人と人のつながりを生みだし、社会に活気を取り戻すための取り組みが世界各地で行われてきた。資本主義が抱える課題の先に見出された地域通貨の中にもまた、「贈与の霊」の精神を確認することができる。

プナンには、「贈与の霊」そのものズバリを考え方はない。しかし彼らも、ものに「贈与の霊」があるかのように、ものを滞らせることなく、循環させようとしている。人が人にものを贈る。もらった人は別の人にそのものを贈る。そのことにより、ものは特定の個人だけに留まることはない。個人占有の否定、つまりケチの小さな芽をつぶすことは、原理的に、ものを循環させることにつながっている。

プナン社会では、与えられたものを寛大な心ですぐさま他人に分け与えることを最も頻繁に実践する人物が、最も尊敬される。そういう人物は、ふつうは最も質素だし、場合によっては、誰よりもみすばらしいふうをしている。彼自身は、ほとんど何も持たないからである。ねだられたら与えるだけでなく、自ら率先して分け与える。何も持たないことに反比例するかのようには、彼は人々の尊敬を得るようになる。そのような人物は、人々から「大きな男 (Vake juaan)」すなわちビッグ・マンと呼ばれ、共同体のアドホックなリーダーとなる。そうしたリーダーのあり方は、高級なスーツを身にまったり、高価な時計を腕に着けたり、ピカピカの高級車を乗りまわしたり、平気で公金を私的に流用したりする先進国の(一部の)リーダーたちとなんと違っていることか。

与えられたものを他人へとすぐさま与えて、ものを循環させるスピリットを持つていけば、彼のもとには、その徳を敬い、彼のことをシタウ人々が集まる。彼の言葉は、集まってきた人々に受け入れられ、人々を動かす原動力になる。ビッグ・マンの口から言葉が発せられれば、人々は狩りに出かけるし、言い争いは鎮められる。

逆に、彼が個人的な欲に突き動かされるようになり、与えられたものを独り占めして出し惜しみし、財を個人の富として蓄

えるようになれば、彼が発する言葉はしだいに力を失っていく。それだけでなく、人々はしだいに彼のもとを去っていく。その時、ビッグ・マンはもはやビッグ・マンではなくなっている。プナンは、ものを惜しみなく分け与えてくれる男性のもとへと集うのである。

なぜそこでは、このような社会道徳が発達してきたのか？ それは、食べることに生きることに関連するように思われる。狩猟に出かけて獲物が獲れなくても、隣の家族で獲物が獲れた場合には、そちらに行つて食べさせてもらう。逆の場合、つまりこちらで獲物が獲れてあちらで獲れなかった場合、こちらはあちらに惜しみなく食べ物を分け与える。そうすることで、共同体の誰もが、空腹に困らず、つねに食べることが可能になる。つまり、ものがある時に惜しみなく分け与えることで、ものがない時に分け与えられることを保証する仕組みが築かれてきたのである。モースは、社会全体に自然の恵みが行き渡るこうした交換様式を「全体的給付体系」と呼んでいる。その仕組みを支えるために、プナンでは「ゲチはダメ」という規範が広く浸透しているのだと思われる。

ものももらった時、何かをしてもらった時に、相手に対して感謝の気持ちを伝える「ありがとう」という表現は、プナン語にはない。ふつう、贈り手に対しては、その場では、何の言葉も発しない。他方で、「ありがとう」に相当する言い回しとして、「*jian kenep*」(よい心)という表現がある。それは、「よい心がけ」であると、贈り手の分け与えてくれた精神性を称える表現である。感謝されるのではなく、分け与える精神こそが褒められるのである。

その意味で、ビッグ・マンは、「よい心がけ」という言い回しによって表される文化規範の体現者でもある。熱帯の狩猟民は、有限の自然の資源を人間社会の中で分配するために、独自の贈与論を生みだしてきた。

ビッグ・マンが発する言葉は、共同体の中でひととき大きな意味を持つ。「キエリテン」の起源を語る神話が、そのことを端的に示している。かつて人を含むすべての動物の頂点にクンリンする王だったキエリテンは、人間に大木を切り倒すように命じ、「耳かきをつくれ」と命じたのである。巨木を切り倒しておいて、そのようなちっぽけなものをつくるように命じるキエリテンには、まったくリーダーとしての資格はない。キエリテンは、やがて王位から滑り落ち、臭い屁を放るだけの動物へと転落したのである。

さて、この熱帯の贈与と交換の仕組みの中で、誰が最も強い存在であろうか？ それは少なくとも持つ者ではない。何も持たない者こそが、ここでは最強である。

〈彼〉〈彼女〉はつねに〈私〉の持ちものをねだりにやっけて来て、〈私〉から持ちものを奪い去っていく。〈私〉にとっての〈彼〉〈彼女〉である他者は、何も持たない者であるからこそ、〈私〉を脅かしつつける。〈私〉は、つねに物欲を抱えているからである。そのうちに、物欲とともに、〈私〉はこの仕組みのウズに呑みこまれる。〈私〉は、やがて持たないことの強みに気づくようになり、最後には、持たないことの快楽に酔い痴れるようになる。

その意味で、^②熱帯の贈与論における「他者」とは、たんにねだりにやっけて来る〈彼〉〈彼女〉のことではない。それは、〈私〉が目指すべき、ねだっては与える〈私〉、すなわち「自己」でもあるのだ。プナンの小宇宙では、^③こうした持つことと持たないことの境界が無化された贈与と交換の仕組みが深く根を張っていて、貨幣を介して、持ちものやお金をためこもうとたくらんで外部から滲入してくる資本主義をばらばらに解体しつづけているのである。

(奥野克巳『ありがともごめんさいもいらぬ森の民と暮らして人類学者が考えたこと』による)

【注】

○プナン——東南アジア、ボルネオ島内陸部の森林に居住する狩猟採集民の総称。

○マルセル・モース(Marcel Mauss, 1872-1950)——フランスの社会学者、民族学者。

○マオリ——ニュージーランドの先住民族。

○中沢新一(なかざわしんいち, 1950-)——日本の人類学者、宗教学者、思想家。

○シルビオ・ゲゼル(Silvio Gesell, 1862-1930)——ドイツの実業家、経済学者。

○自由貨幣——シルビオ・ゲゼルが考案した通貨制度で、発行日が明記され時間の経過とともに価値が減っていく貨幣。

○アドホック——「暫定的な」、「その場限りの」などの意。

○キエリテン——イタチ科の動物。

問一 傍線部 a、j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 プナン社会について書かれた次のア、カの記述のうち、本文と合致しているものには○、合致していないものには×を、それぞれ解答欄に記入せよ。

ア マレーグマは、尊敬される人物のたとえである。

イ ものは特定の個人だけに留まることなく循環する。

ウ 個人的な欲に突き動かされることなく、与えられたものにはすぐにお返しをする。

エ プナンの幼児は、教えなくても飴玉を分け与える。

オ 贈り手への感謝よりも、分け与える精神をたたえる。

カ キエリテンは、ビッグ・マンのたとえである。

問三 傍線部①について、地域通貨の中に「贈与の霊」の精神が確認できると筆者が考えるのはなぜか、本文に即して一〇〇字前後(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部②について、プナンのような狩猟民の社会で「熱帯の贈与論」が生み出された理由を、本文に即して一〇〇字以内(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

問五 傍線部③について、「持つことと持たないこととの境界が無化され」とはどのようなことか、本文に即して一二〇字以内(句読点・かっこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、幕末明治を生きた三河(愛知県の東部)刈谷藩医・国学者で大蔵書家、村上忠順ただまさが、老後に作製した自分の蔵書目録の末に付した跋文はつである。これを読んで、後の間に答えよ。

この目録三巻まさは、人に見すべきものにもあらねど、数多くそひゆくままに、あるは失せ、あるははふらかしもぞするとて、かくはものしつるになむ。今より行く先、求めもし、写しませむまにまに、書きも入れてむ。

そもそもこのつどへたる書かみどもよ、やくなきも多かれど、^①なにくれとあなぐり求めむには、さしもなき書といへども、なくてはえあらぬものなれば、尾張の名古屋なごやなる書肆ふみやらが、見せにおこせたるまにまに、求めおきつるなり。また得がたきは、京師みやこ・浪速なにははさらなり、木の国にたよりもとめ、江戸にあとらへなどして、からくして得たるなれば、おのれなからむ後にも、子孫こうまども、失なひ散らさで、わが志をつぎてよ。もしわが学びの道のかたにはえおもむかずとも、^②年としごとによくほしきとして、しみのすみかとはなせぞ。

^③かくいはば、いとしふふかき事とあさみわらふべけれど、この書どもは、からぶみの四書五経などを求むるがごと、たはやすくは得がたければなり。さるは、写し巻にて伝はれるはさらなり、刷り巻といへども、かの四書五経のごと、書肆しよせてふ書肆しよせに家ごとには持たらず、^④とみにえうずる事ありて、こころ尋ね求むれども、え得ずて、^⑤一二年ふたとせ三歳みつとせへてやうやう得たるなどあり。かかれば、はつかなる書にても、たはやすく得たりとな思ひそや。かばかりは、富める人のあたりには、風にうかるる塵ならめど、いふかひなく貧しきおのれにとりては、おぼろけならむやは。

また、写したる、書き入れたるなどは、夜中・暁あけといはず、君につかへ、病人やまうと見ありくいとまのひまにものせしなれば、こ
とにからくしていで来たるなり。鬼の目をつぶしかけたらむごとき手して書きたりとして、いたくな思ひおとしそ。人のひめ持
たるを、あながちにこひ得て写ししなれば、これはたおほかたにはあらずかし。かにもかくにも、ゆめなはふらしそ。

くがねにもしかずと子らや思ふらむかたみにのこす千卷ちまき八千卷ちまき

【注】

○はふらかし——「はふらかす」は放置すること。

○尾張——愛知県の西部。

○木の国——紀伊国(和歌山県

と三重県の南部)。江戸時代には紀伊和歌山の本屋から国学系の書物が数多く出版された。

○からぶみ——漢

籍。

○写し巻——写本。書写された本。

○刷り巻——版本。印刷された本。

○鬼の目をつぶしかけたら

むごとき手——悪筆の意。『うつほ物語』に見える表現。

○はふらし——「はふらす」は「はふらかす」に同じ。

問一 傍線部①④を、わかりやすく現代語訳せよ。

問二 文末の和歌について、そこに込められた筆者の思いを説明しつつ、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 当時の人が書物を手に入れて読むのに、どのような苦労があったか、この文章から推察できることを説明せよ。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

黄生允修借書。随園主人授以書、而告之曰、

書非借不能讀也。子不聞藏書者乎。七略、四庫、天子之書。

然天子讀書者有幾。汗牛塞屋、富貴家之書。然富貴人讀

書者有幾。其他祖父積、子孫棄者無論焉。非獨書為然、天下物

皆然。非夫人之物而強假焉、必慮人逼取而惴惴焉。摩玩之

不已、曰、今日存、明日去、吾不得而見之矣。若業為吾所有、必

高束焉、虔藏焉、曰、姑俟異日觀云爾。

余幼好書、家貧難致。有張氏藏書甚富。往借、不與。歸

而形諸夢。其切如是。故有所覽輒省記。通籍後、俸去書來、

落落大滿、素蟬灰糸時蒙卷軸。然後嘆借者之用、心專、而少

時之歲月ノ為レ可レ惜シム也。

今黃生貧シキコト類シ予ニ其借ル書ヲ亦類ス予ニ惟予之公ニスルト書ヲ与ニ張氏之客をシム
書若シ不相ヒセ類セ然則予固不幸ニシテ而遇フ張乎ニ生固幸ニシテ而遇フ予乎ニ知レバト幸
与ヲ不幸ヲ則其讀ム書ヲ也必專ラニシテ而其歸ス書ヲ也必速ヤカナラント

為ツクリテ一說ヲ使ム与ニ書ト俱そなへ。

(袁牧えんばい「黃生借書說」による)

【注】

○黃生允修——黃允修は人名。生は呼称。

○隨園——清代の文學者袁牧の号。

○七略——漢代の劉歆りゅうきんが編んだ宮中の書籍目録。

○四庫——清代の紀昀きいんらが編んだ宮中の書籍目録。

○汗牛塞屋——書物を車に載せて牛に引かせると汗をかくほどであり、部屋をふさぐほどの書物があることをいう。蔵書の多いことのとえ。

○惴惴焉——戦々恐々とするさま。

○度藏——しまう。

○通籍——宮中に仕えること。

○落落——たくさんあるさま。

○素蟬灰糸——紙を食べる白い虫と灰色の蜘蛛の糸。

○客書——本を貸し渋ること。

問一 波線部 a「強」b「惟」c「固」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「天子読_レ書者有_レ幾」を現代語訳せよ。

問三 傍線部 2「非_ニ独書為_レ然」を書き下し文にせよ。

問四 傍線部 3「其切如_レ是」を「是」が指し示すものを具体的に説明して現代語訳せよ。

問五 傍線部 4「公_レ書」とはどのような意味か。本文の内容に即して説明せよ。

問六 傍線部 5「其読_レ書也必專、而其歸_レ書也必速」を現代語訳せよ。

問七 二重傍線部「書非_レ借不_レ能_レ読也」について、袁牧はなぜそのように主張したのか。本文の内容に即して一五〇字以内で

まとめよ。

